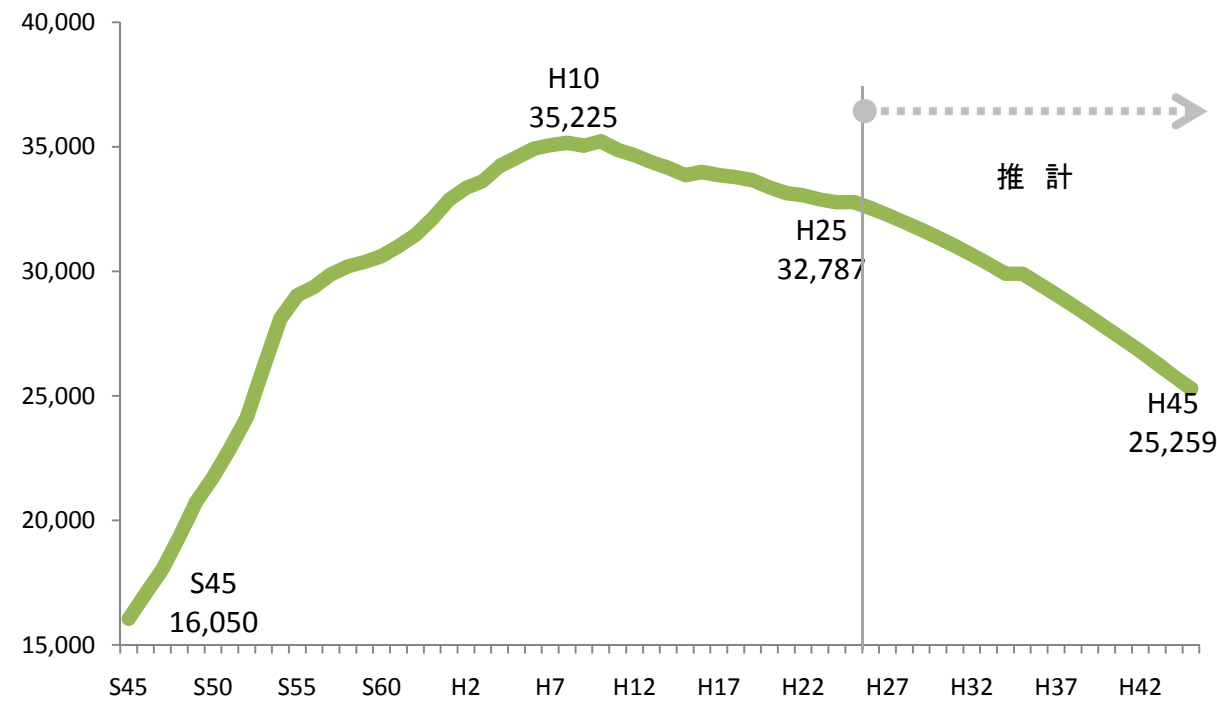


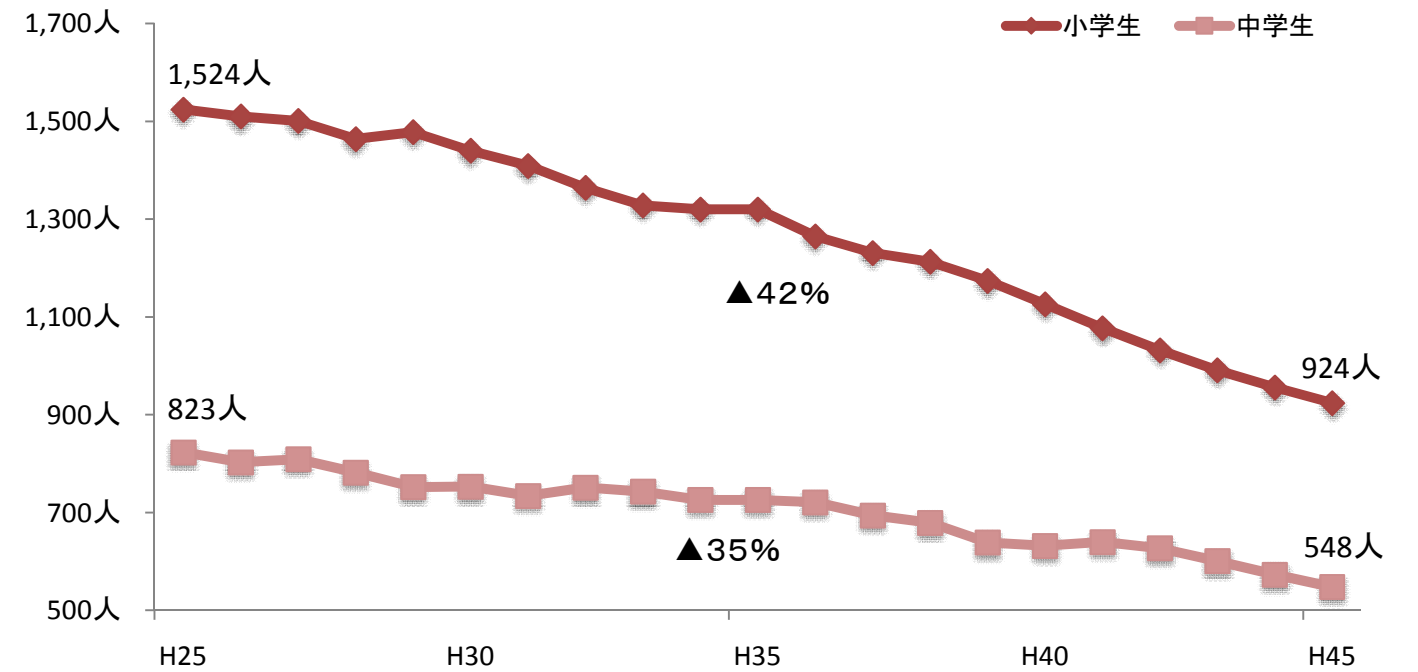
資料1 人口（児童・生徒数）の推計 平成25～45

人口	平成25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
小学生	1,524	1,510	1,501	1,464	1,478	1,440	1,409	1,364	1,328	1,320	1,320	1,265	1,231	1,213	1,174	1,126	1,077	1,032	991	956	924
中学生	823	803	809	782	752	753	734	751	743	726	726	721	694	679	639	632	640	627	601	573	548

推計1 町全体の人口



推計2 児童・生徒数の見込み



推計1 人口推計について

一般的に用いられる「コーホート法」により平成45年(20年後)を推計しました。なお、本推計には道仏地区土地区画整理事業(計画人口2,600人)などの、開発人口は含めていません。

推計2 児童・生徒数

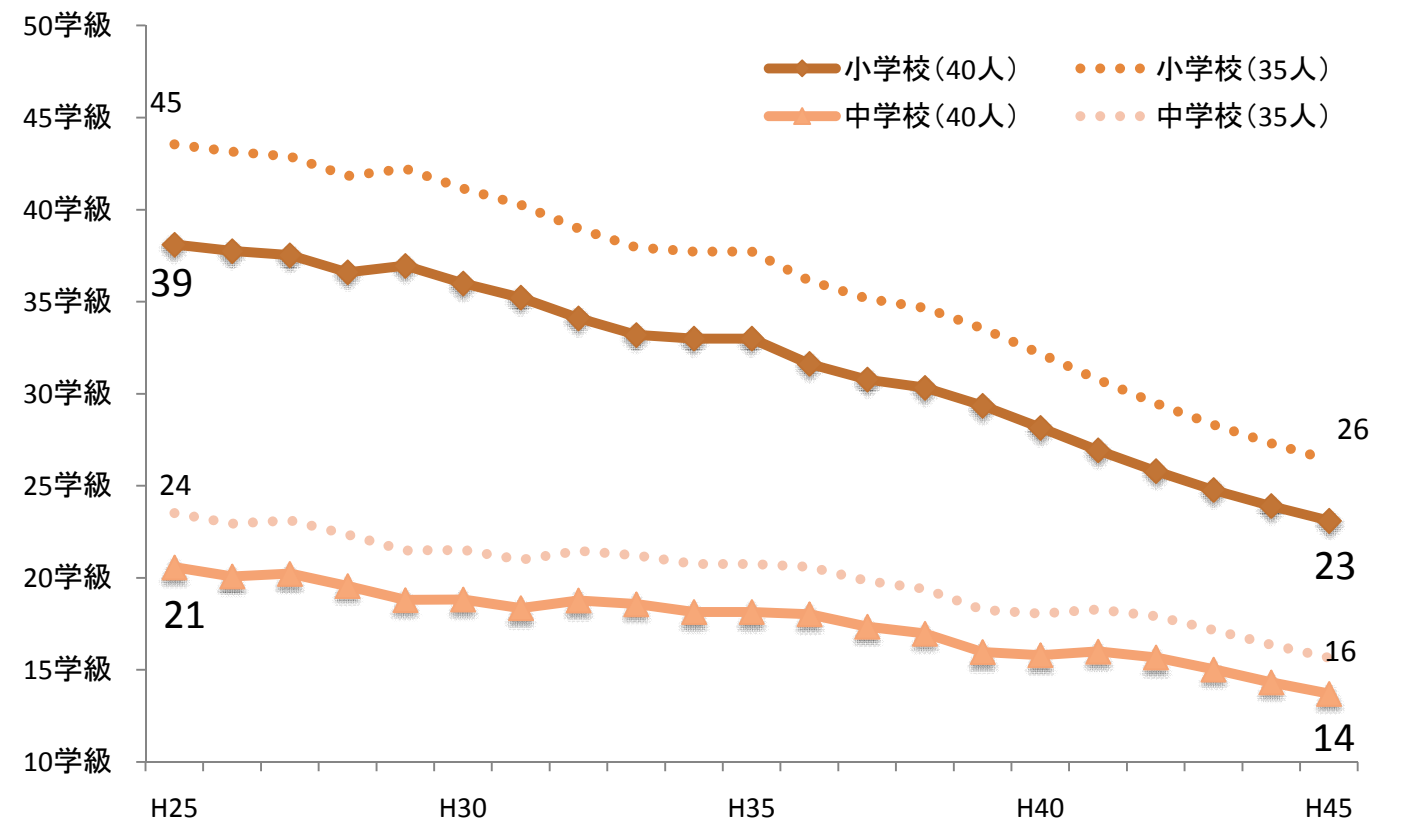
推計1のうち、7～12歳を「小学生」、13～15歳を「中学生」として集計しました。出生率が低い今日にあっては、若年層の減少は避けられないことが窺えます。

推計3 学級数の推計

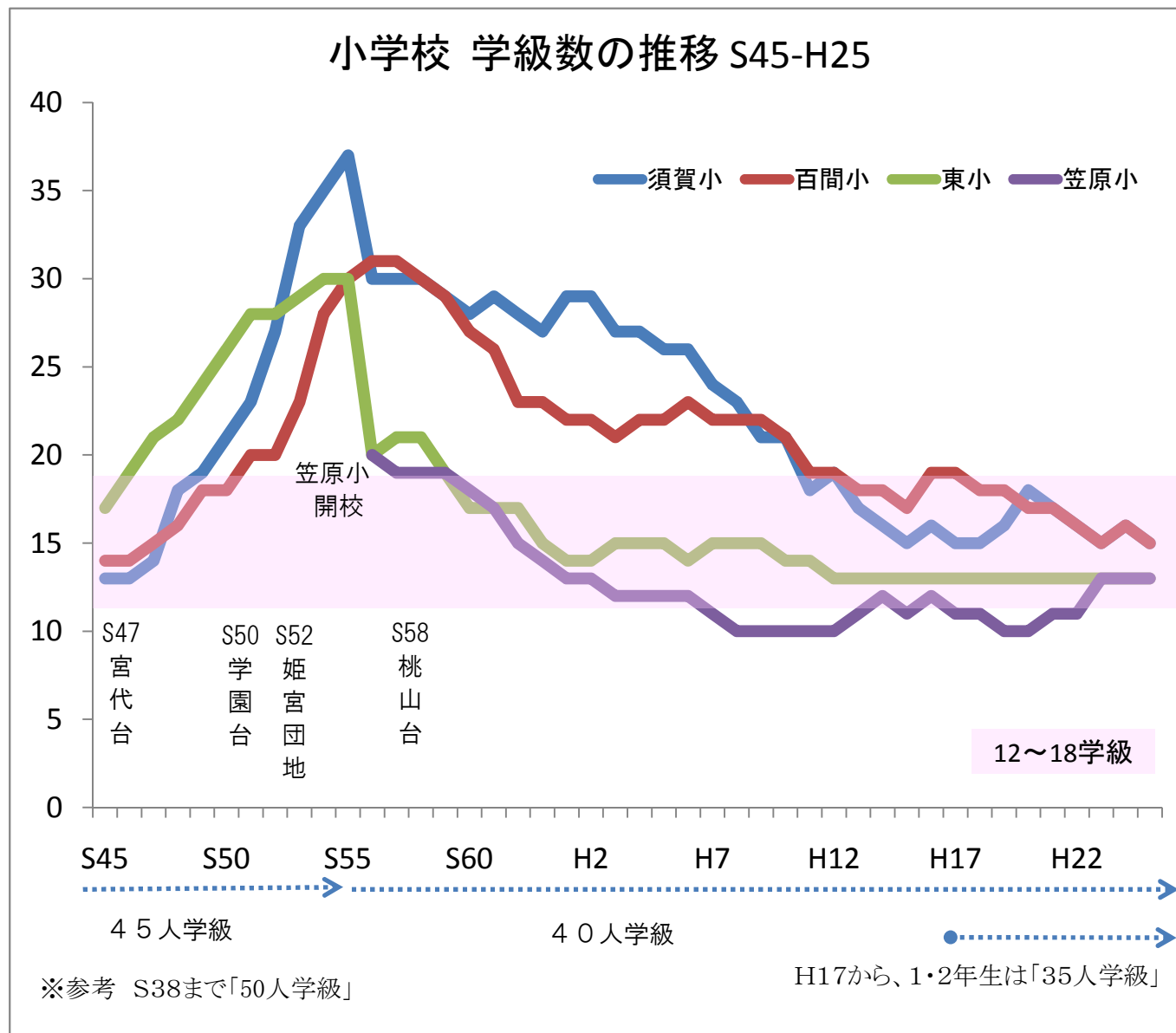
推計2の児童生徒数を、1クラスあたりの人数(40人・35人)で、単純に除して求めた数値です。

40人は現行の制度、35人は「将来想定される変更」を織り込むための推計です。

推計3 学級数の見込み



資料2 小中学校別 学級数の推移



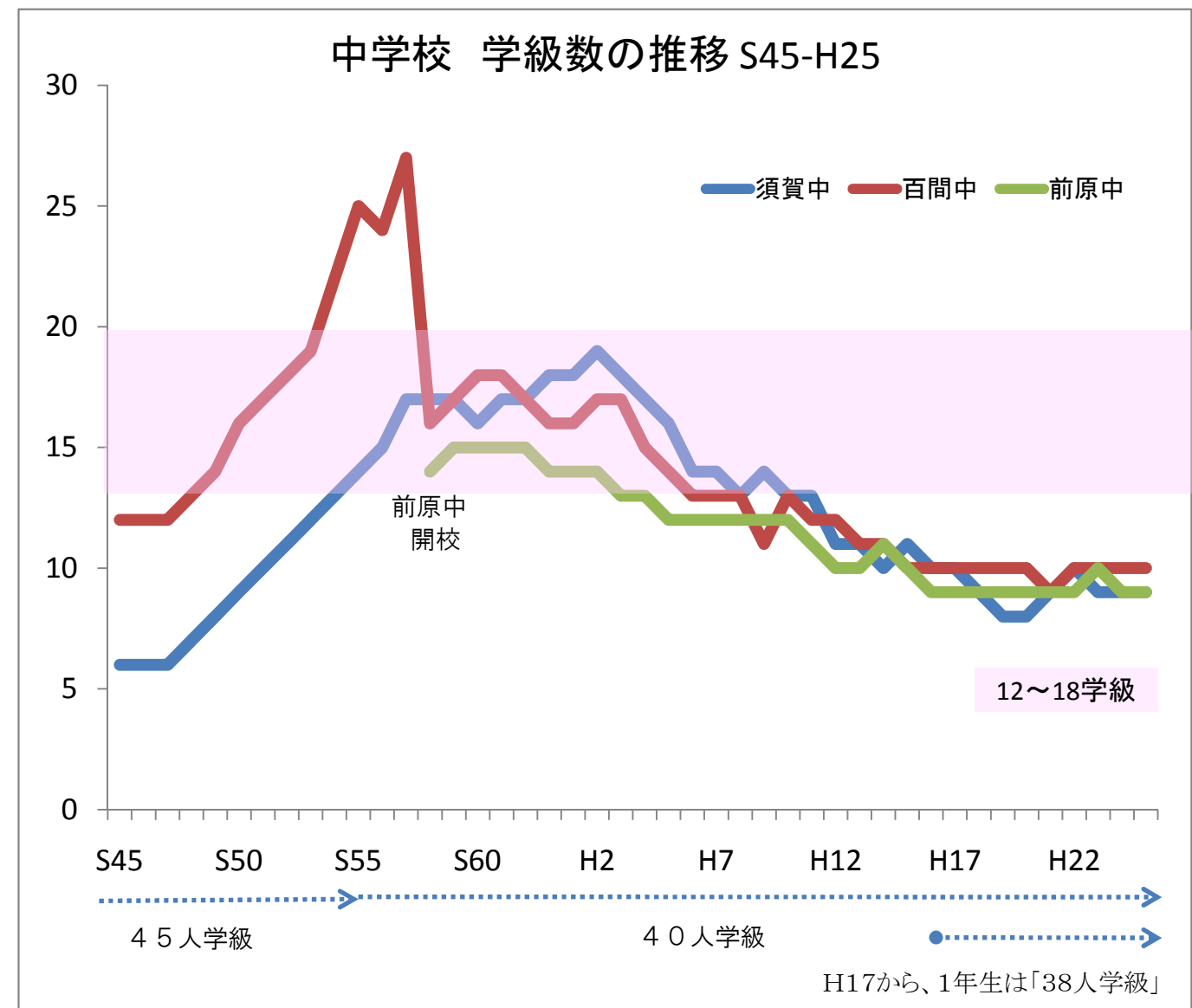
《教育基本法施行規則(抜粋)》

第41条 小学校の学級数は、12学級以上18学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。

第41条 第41条から第49条まで、第50条第2項、第54条から第68条までの規定は、中学校に準用する。

- ・1校あたりの学級数では、前原中が開校(S57)する前年度がピーク。
- ・「須賀中17学級」は標準規模の範囲内ですが、「百間中は27学級」に上っていました。
- ・その後の減少はグラフのとおりで、3校ともに「9学級」に止まっています。
- ・聞き取り調査では「教員確保」「部活動」などの課題が聞かれました。

中学校 ↓



↑ 小学校

- ・昭和40年代からはじまった宅地開発を背景に人口が増加し、1校あたりの学級数では、笠原小が開校(S56)する前年度がピーク。
- ・それぞれ、「須賀小37学級」「百間小30学級」「東小30学級」を擁していました。
- ・その後、児童数に連動して減少が続き、現在の学級数は「13~16学級」と標準内に収まっています。
- ・各小学校での聞き取り調査でも「ちょうど良い規模」という声も聞かれています。

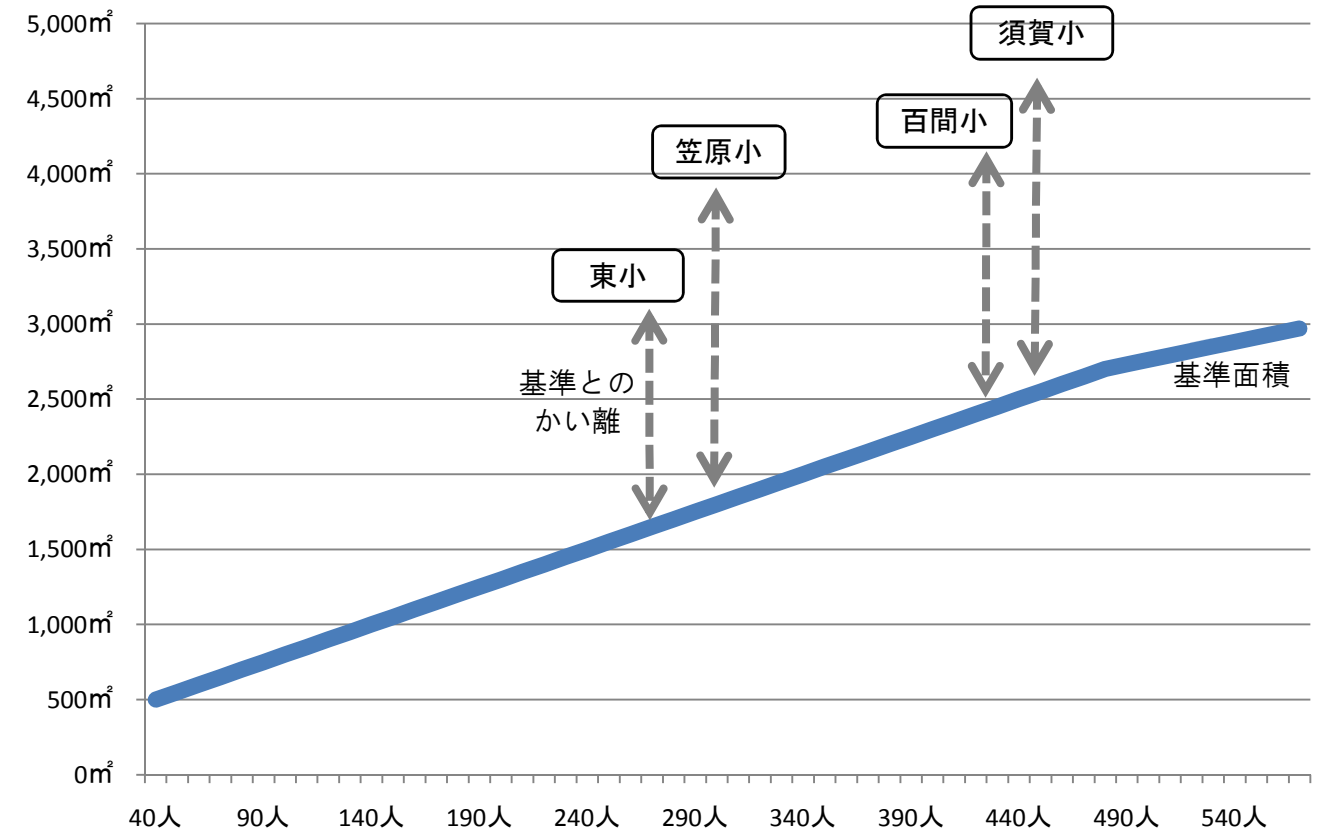
【参考】

●小・中学校設置基準（文部科学省令）

学校教育法第3条に基づき、文部科学省令で面積基準が設けられています

全般		
校舎及び運動場は、同一の敷地内又は隣接する位置に設けること		
配置施設		
教室（普通教室及び特別教室）		
図書室		
保健室		
職員室		
特別支援学級のための教室（必要に応じて）		
体育館（地域実態、特別の事情があり教育上支障ない場合は不要）		
校舎		
区分	小学校	中学校
～40人	500㎡	600㎡
41～480人	500㎡+5㎡*(児童数-40人)	600㎡+6㎡*(児童数-40人)
481人以上	2,700㎡+3㎡*(児童数-480人)	3,240㎡+4㎡*(児童数-480人)
運動場		
区分	小学校	中学校
～240人	2,400㎡	3,600㎡
241～720人	2,400㎡+10㎡*(児童数-240人)	3,600㎡+10㎡*(児童数-240人)
721人以上	7,200㎡	8,400㎡

小学校 校舎基準面積グラフ



平成25年度児童・生徒数を基礎とした校舎基準面積の算定

(単位:㎡)

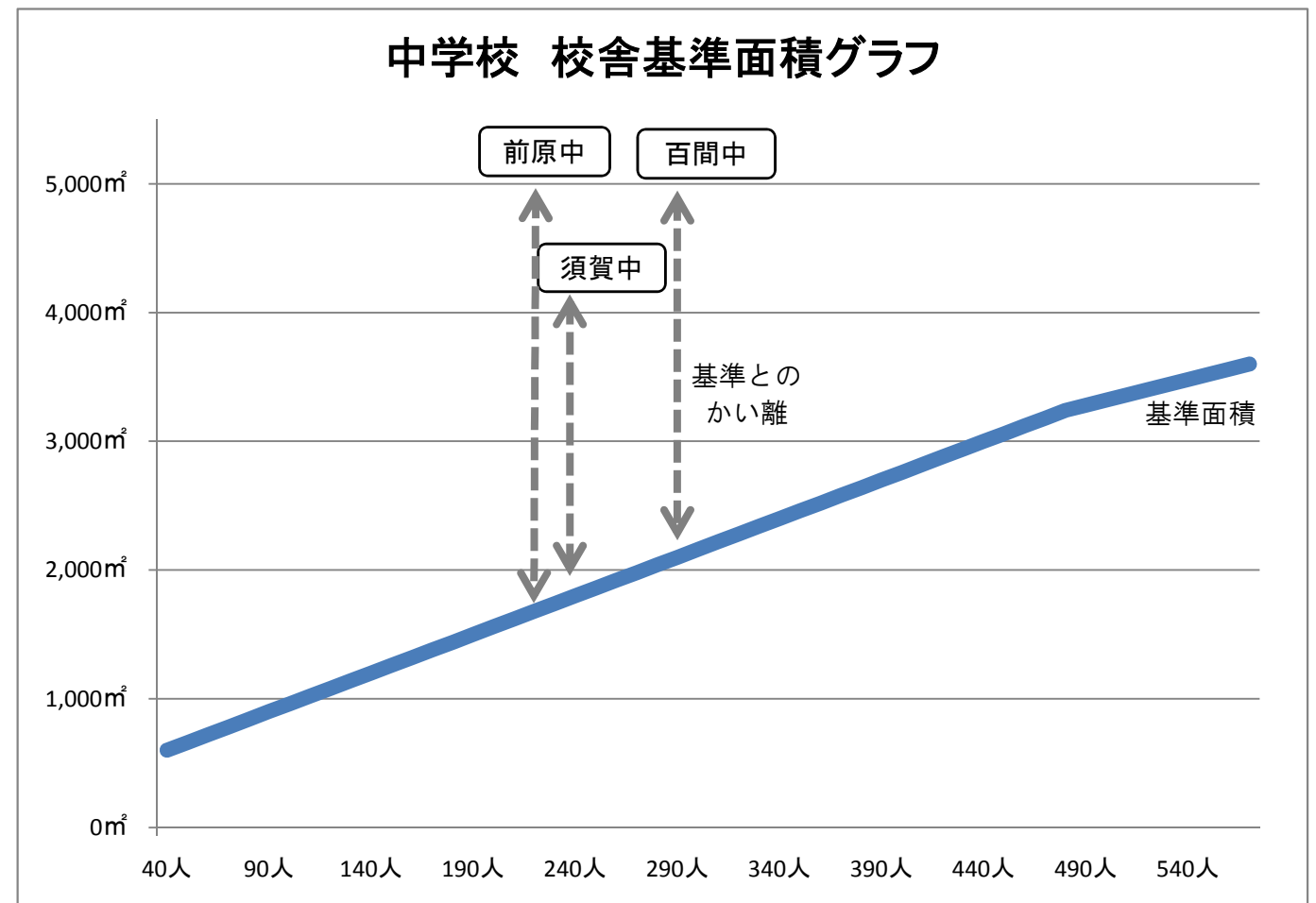
学校名	児童・生徒数	基本面積	人数割	基準面積	床面積	超過率
須賀小学校	450人	500	2,050	2,550	4,931	51.7%
百間小学校	435人	500	1,975	2,475	4,288	57.7%
東小学校	277人	500	1,185	1,685	3,348	50.3%
笠原小学校	316人	500	1,380	1,880	4,084	46.0%
須賀中学校	243人	600	1,218	1,818	4,363	41.7%
百間中学校	294人	600	1,524	2,124	5,164	41.1%
前原中学校	238人	600	1,188	1,788	5,197	34.4%

*小中学校とも、最も児童・生徒数の多かった昭和60年頃にかけて増築してきたが、現在は、児童・生徒数が減少しているため基準とのかい離が生じている。

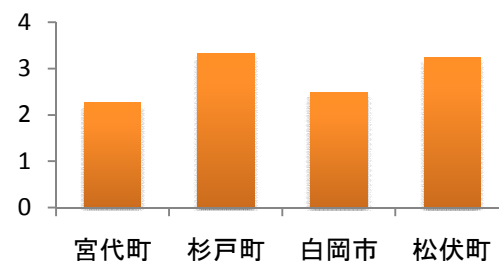
*特にかい離の大きい学校については、以下の要因が考えられる。

笠原小学校 … 1教室の面積が他の学校より大きい（約1.5倍）ため、かい離大
 東小学校 … 一時期、別敷地に第二校舎を備えていたため、かい離小

中学校 校舎基準面積グラフ

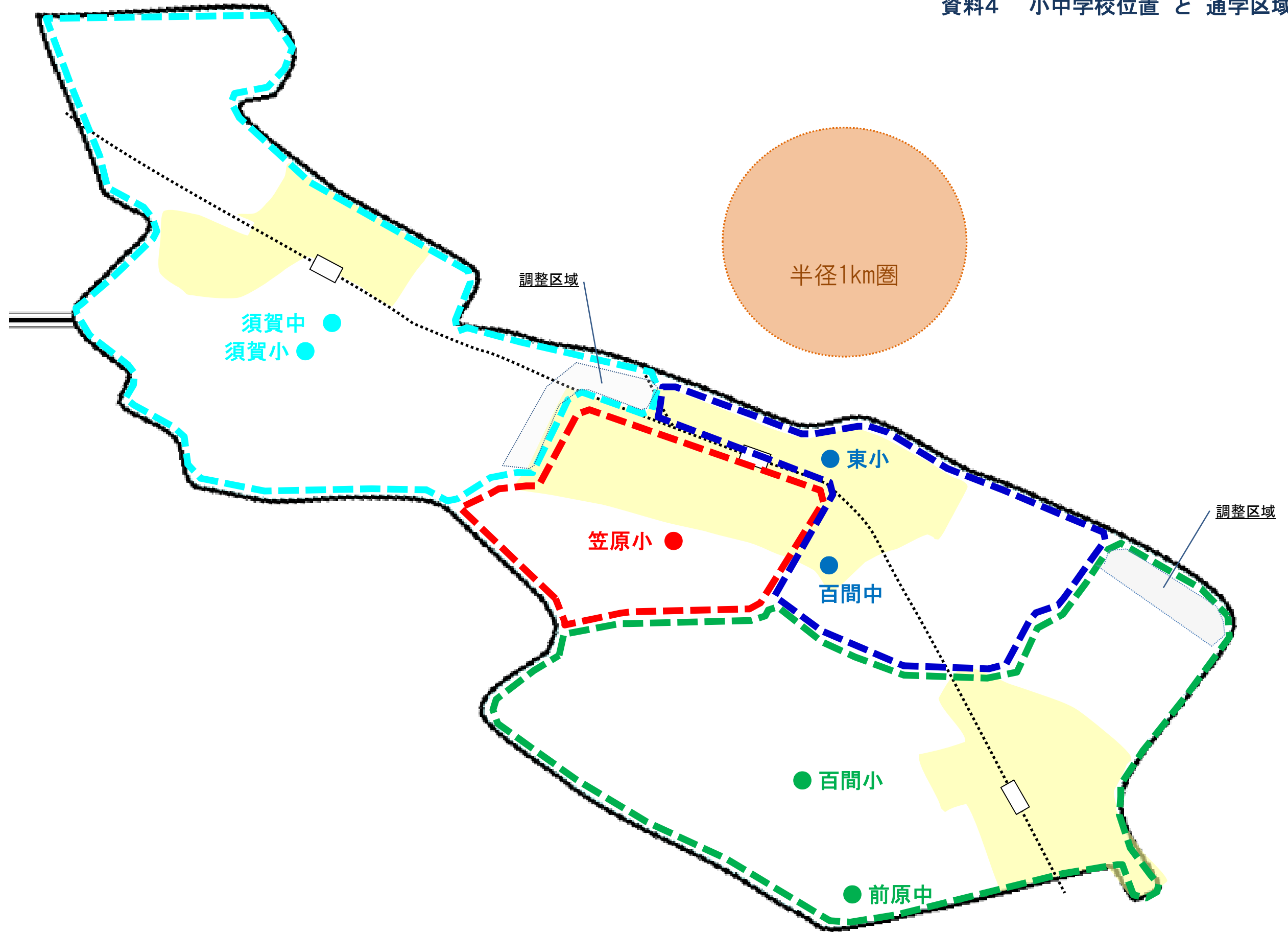


1校あたり行政面積



【参考】学校配置密度 ～行政面積と学校数の相関

	宮代町	杉戸町	白岡市	松伏町
小中学校数	7校	9校	10校	5校
行政面積（平方km）	15.95	30.00	24.88	16.22
1校あたり面積	2.28	3.33	2.49	3.24



1. 児童生徒数の減少・学校の小規模化

(1) 教育環境に、こんな変化が生じています

◆人間関係の固定化が心配されています（共通）

互いに切磋琢磨する機会が少なくなったり、「運動は〇〇クン」「勉強は△△ちゃん」など、子どもの立場が固定化しやすい傾向があります。

単学級の場合「人間関係がこじれた場合でもクラス替えができない」という課題もあります、保護者同士の関係についても同様のことが言えるようです。

◆先生の数が減っています（共通）

先生数は「クラス数」に応じて決められるため、児童生徒数の減少に応じて少なくなります。この結果、学校管理の負担が増え、子どもたちとの活動に影響が生じる心配があります。

- ・全教科の担任の確保が難しい（中学校）
- ・先生同士の協力、相談する機会も減少
- ・啓発、研修機会への参加が制限
- ・行事や部活動に制約
- ・ひとりの先生が、複数の校務を兼任

◆部活動の種類、活動が限られています（中学校）

生徒数に加えて、教職員（顧問）の数も減少しているため、部活動の種類も限定され、生徒、保護者のニーズに応え切れていません。

(2) 学校の規模（クラス数）について

◆小学校 1学年3クラスが望ましい

1学年に複数の学級があれば、行事の相互連携、協力・相談ができます。また「単学級」で心配される、「人間関係がこじれた場合でもクラス替えができない」問題や、教員が1人1学年で運営することの不安も解消されます。

◆中学校 1学年あたり「4～6クラス」が望ましい

中学校の1学年のクラス数は「4～6クラス」が理想、教科担当の配置を考えると「6」、偶数が望ましいようです。

中学校は9教科ですが、全教科の教員配置には9クラスでは不十分とのこと。例えば、時間数の少ない科目の場合、県から非常勤を配される場合もあるため「12クラスは欲しい」というご意見もありました。

(3) 1クラスあたりの児童・生徒数について

◆小学校 1クラスあたり「25～30人」が望ましい

児童一人ひとりに目が届き、かつグループ学習や体育のいろいろな競技にも対応でき、活性化という点でも望ましい人数です。

子どもの体格も良くなってきているため、現行の基準「40人」では多いようです。また、子ども達が集団で育つ環境としては、「20人以下」では難しい面があるそうです。

◆中学校 1クラスあたり「30人」が望ましい

小学校同様の考え方ですが、子どもの成熟度や活動内容を考慮すると、小学校より少し多めの人数が望ましいようです。内訳の例として「6人のグループ×5班」というご意見もありました。

(4) その他 少人数対策

現在行われている取り組みとして、「地域と一緒に運動会（白岡市大山小）」を行ったり、あるいは「複式学級」などがあるそうです。

また、子ども達に様々な経験を積ませる手立てとして、綱引大会など校外の活動にも積極的に取り組むことも行われています。

2. 学校施設

(1) 校舎のつくり

現在は・・・

- ・老朽化により修繕箇所が増加
- ・増築を重ねたため「動線」が複雑、使い勝手が良くなく、危険なケースも
- ・学校の音や校庭の砂ぼこりなど、周辺住宅との共存が難しい場合も

これからは・・・

- ①「安全管理」 管理しやすい建物構造、避難経路にも配慮を
- ②「ゆとりある教室」 教科書、机の大判化に対応
- ③「スペースの工夫」 廊下側の壁をなくす、1学年程度で集会できるスペース など
- ④「立地条件」 南向きの玄関（植物の生育良好、降雪後の管理も容易）
子どもたちが体を動かせる環境（学校周辺の環境）
- ⑤「素材」 木の温もり、じゅうたんフロア など

(2) 設備・備品

- ・冷暖房設備
- ・校内のネットワーク、パソコン
- ・視聴覚設備
- ・課題追求のための学習室（情報活用室）の設置
図書館、パソコン、プリンター、コピー等の情報収集・情報発信ができる設備
- ・職員室～教室間の連絡システム（インターホン等）
- ・灯油供給のシステム
- ・軽量、かつ使い勝手が良い机

(3) その他

スペースの柔軟性が必要

- ・児童生徒数の変動に対応できる、柔軟な施設が望ましい
- ・特別教室は、学習要領の改定で必要になるものもある、今後情報科ができるのではな
グラウンド
- ・砂ぼこり対策として「グリーンコート（川砂）」というのがある（春日部江戸川中）

3. 多機能化の可能性と配慮事項

◆可能性？

- ・ひだまりサロン（笠原小）では、子どもたちが様々な体験を享受できている
- ・笠原小のように、他の機能が入っているのは良いこと
- ・図書館機能があれば、図書の実用と司書の活用が図れる

◆配慮すべきこと

- ・児童生徒の安全確保 他機能との区分は必要
- ・光熱水費
地域での学校利用がある場合、光熱水費が課題、学校で節約の自助努力をしても、地域利用で使われては元も子もないので学校に支障がないようにして欲しい

小中学校の適正配置に関する意識調査 実施計画（案）

- 【趣旨・目的】** ①審議会検討の基礎資料 ②少子化による教育課題の抽出 ③適正配置計画策定の基礎データ収集
- 【実施時期】** 配布：平成25年10月 / 集計：平成25年11月
- 【配布・回収】** 教育委員会 ⇄ 各小中学校(学級担任) ⇄ 児童生徒 ⇄ 保護者
※記入後、「封入」して提出
- 【対象・サンプル数】** 小中学生の保護者 約2,000件（≒ 児童生徒総数 約2,200名）
※分析のため「小中学校それぞれに兄弟がある場合」は、いずれも回答を依頼

I 回答者	設 問 内 容	活 用
<ul style="list-style-type: none"> ・性別、年代 ・子どもの学年 	男女の別、年齢(5歳区切り) 小1 ～ 中3	クロス集計に活用
II 通学状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・通学手段 ・通学時間、距離の上限 ・通学区域設定について 	徒歩、自転車、その他 何分(何km)までなら通える範囲か？ 通学路、通学区域設定時の配慮事項	通学区域設定時の基礎資料に活用
III 学校、学級の規模		
<ul style="list-style-type: none"> ・小規模化による課題 ・1クラスあたり人数 ・1学年あたりクラス数と理由 ・今後の教育環境 	児童生徒数、学級数の減少に対する意見 理想の1クラス児童、生徒数 理想の1学年クラス数 これからの学校に望まれる施設、設備、機能	学校教育環境の課題抽出・整理 学校施設建設時の配慮事項
IV 地域との連携、共存		
<ul style="list-style-type: none"> ・多機能化の可能性 ・どのような機能が良いか 	児童生徒、地域とが共用することについて 学校に併設する機能の選択	多機能化の可能性、作法の基礎資料
V 自由意見欄		
各種意見の抽出		